

●県が被災の救援や復興援助に努力されていることに敬意を表したいと思います。

●貞観地震が起こった9世紀と同様、今後数10年にわたって、日本列島では、南海地震などの巨大地震、内陸型地震、巨大噴火など、大災害が立て続けに起こると予想されます。そのような災害に直面した時の県民の苦しみを減らすために重要なのは、起こりうる災害を適切な想定すること、それに対応する町作り、災害が起きたときの被害を最小にすること、回復力の向上だと思えます。これらについて気がついたことを述べさせていただきます。

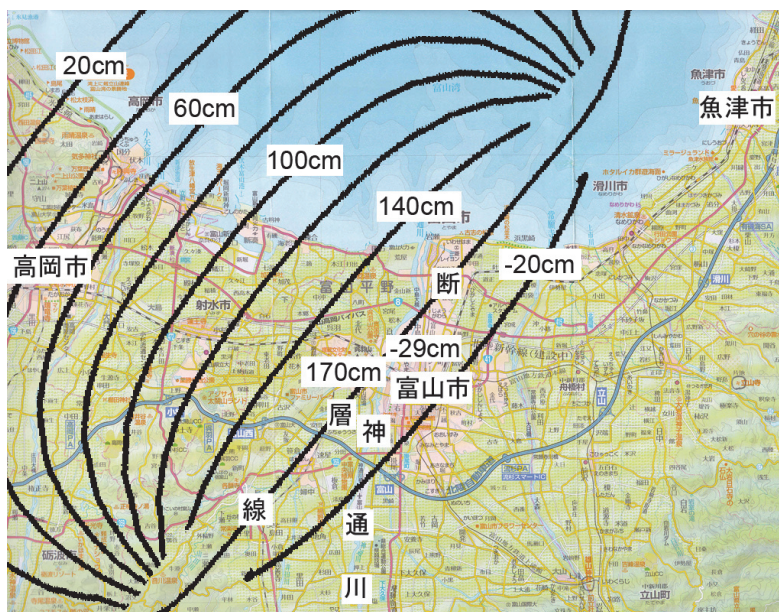
●高度成長期に急拡大したライフラインは、現在、急速に耐久年数を過ぎ、老朽化が進行しています。積極的に更新していかないと、20～30年後に南海トラフで巨大地震が起こったとき、老朽化したライフラインが多くの場所で破断し、住民を苦しめることになるでしょう。

●想定から漏れている災害の可能性ですが、呉羽山断層で地震が起こったときの地殻変動は下図のようになるでしょう。幸運にも断層面上端が地下数100mにとどまり、地表に突き抜けないとしても、大局は変わりません。断層西側で170cmの隆起し、富山市中心部でほぼ30cm沈降します。最悪の場合、神通川は、富山市内で流路を北東に変え、市内の多くが水没。ライフラインが尽く切断される可能性が否定できないと思えます。

市街地を縦断する活断層の上盤が下流という例外的な位置関係のために起こると予想される珍しいタイプの災害です。

●都市型住民の住宅地が海岸近くまで及んでいたことが東日本大震災の被害拡大の1因になりました。「公」が海岸近くに団地を造ったり、宅地開発をするのは改めるべきでしょう。

●被害想定を、県の都市計画や将来計画に生かすことが重要。



地震調査委員会の活断層評価のパラメーターを使って計算した上下変動の分布図。ただし、断層の長さは富山県の活断層調査による38kmを、断層の走向は地表断層の走向に合わせてN45Eとした。

現在の地震学や活断層学の知識の範囲内では、ここで想定した通りの地震が起こるのか、震源断層が地表に突き出るといかなどについては確実なことは分からず、不確定要素は多い。しかし、このような災害リスクが潜在していることは確か。